

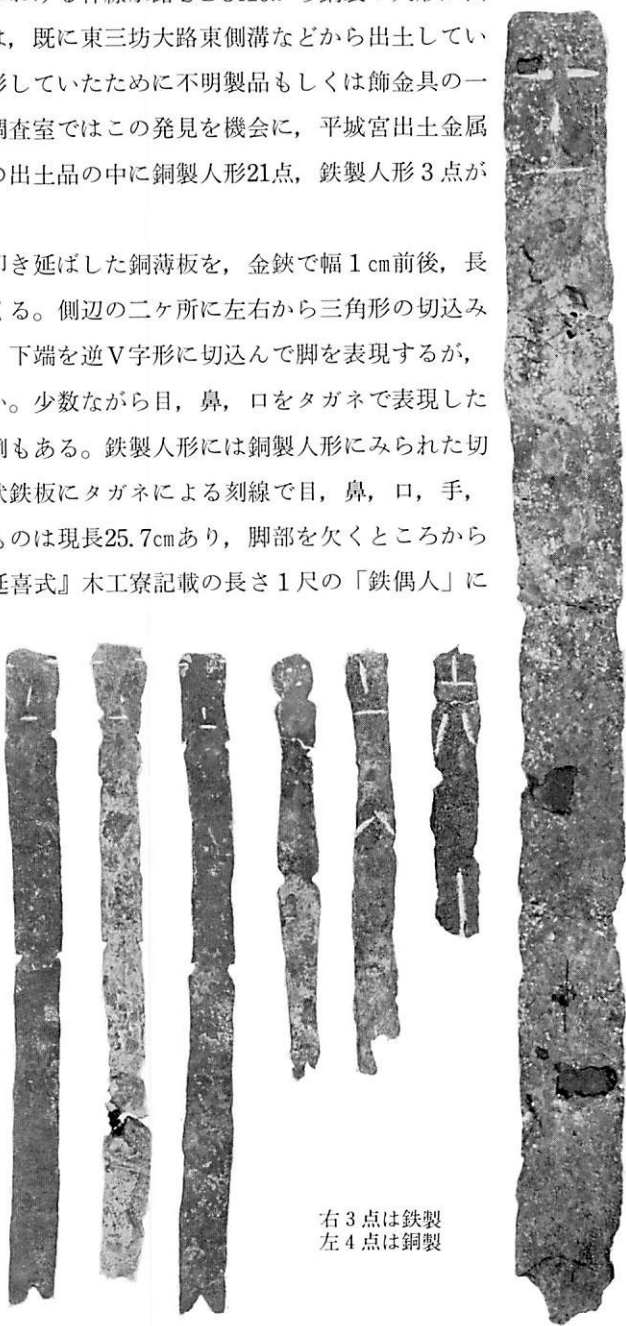
平城宮出土金属製人形

平城宮跡発掘調査部

平城宮第154次調査で、宮東部における幹線水路SD3410から銅製の人形が出土した。この人形に類似した製品は、既に東三坊大路東側溝などから出土していたが、いずれも断片であったり変形していたために不明製品もしくは飾金具の一部として扱われてきた。考古第一調査室ではこの発見を機会に、平城宮出土金属製品の総点検をおこない、今までの出土品の中に銅製人形21点、鉄製人形3点が存在することを確認した。

銅製人形は、厚さ0.3mm前後に叩き延ばした銅薄板を、金鋏で幅1cm前後、長さ13.5cm前後の短冊形に切ってつくる。側辺の二ヶ所に左右から三角形の切込みをいれて頭部、胴部、脚部を分け、下端を逆V字形に切込んで脚を表現するが、木製人形に通有の手の切込みはない。少数ながら目、鼻、口をタガネで表現したものがあり、一部に銀箔を留める例もある。鉄製人形には銅製人形にみられた切込みがなく、厚さ2～3mmの短冊状鉄板にタガネによる刻線で目、鼻、口、手、脚を表現する。鉄製人形の最大のもは現長25.7cmあり、脚部を欠くところから本来は30cm近い製品とみられ、『延喜式』木工寮記載の長さ1尺の「鉄偶人」に相当するものと考えられる。『延喜式』によるとこの鉄偶人は金銀薄で飾られ、六月・十二月晦日の大祓や、天皇・中宮・東宮の「御贖、御麻」に数多く用いられている。今回発見の金属製人形の多くは銅製で、長さも1尺には及ばないが、宮内の幹線水路や宮の南面外濠である二条大路北側溝、入隅部の東面外濠である東一坊大路西側溝などから集中的に出土している点を考慮すると、宮城の南路でおこなわれた大祓や宮中での祓に用いられた可能性は高く、『延喜式』に記された儀式の内容が8世紀にまで遡りうる有力な証左の一つとなろう。

(松村恵司)



右3点は鉄製
左4点は銅製

平城宮出土金属製人形（縮尺2：3）